

ましける、されどいとわか、さかりにおはしますさまをおしくかなしとみ奉らせ給つ、しませ給ふべき御としなるにはれ、しからで、月頃過させ給ことだに、なげきわたり侍つるに、御つ、しみなどを、つねよりも、ことにせさせ給はざりけること、いみじうおぼしめしたり、

〔源氏物語

若菜三十五

〕ことしは、卅七七にぞ成給ふ、上紫

み奉り給ひし年月のことなども、哀におぼしい

でたるついでに、さるべき御いのりなど、つねよりとりわきて、ことしはつ、しみ給へ、ものさがしくのみありて、思ひいたらぬことしもあらんを、なをおぼしめぐらして、おほきなること、もし給は、をのづからせさせてん、

〔橘庵漫筆四〕世俗、四十貳歳は疫年なりとて、俄に鬼神に媚て、奸巫貪覘の爲に財を費して、福を祈り、邪祟なからんことをねがふ、何の據か有て、斯四十二歳を恐る、や、疫年の説おこがましく記したる書許多あれども、望洋たる杜撰、男子の見る物にあらずと、書名さへ覺へざりき、按るに、男子は大陽にして、其廻れるとし重陰なり、四と二と合て老陰六の數となり、不足すべき陰は、却而有餘の四上に有て、陽を剝する故、恐る、なり、又女子の純陰なるに、大陽の數三三と並び廻る年故、慎なるべし、その疫を、俄に恐る、こと、水の溢れ來り、火の疾くうつるがごとし、何んぞ四十二歳に至れば、火災水難の俄に來るがごとく、凶事の起らんや、何故これを神に媚佛に歎きて、幸を求るや、殊に國により、二の正月とて、年替をするなど、親族朋友を招き、大に宴し、美酒佳肴をつらね、饗應善盡こと、冠婚の禮の大なるよりも、甚しくこれを祝へり、其愚の甚しきや、慎べきを却而祝し、大宴を設くるにいたる、是恐るまじきを驚き、慎べきを祝す、これ何事ぞや、己つ、しみて罪を天に得れば避るに所なし、○中略

或云、四十二は、死と云訓にて、三十三は、散々と云音なり、故に疫年として忌めりと云へり、何れより出し説かゝらず、何んぞ四十二、三十三にかざるべけんや、一生涯を常疫とし、平素其獨を